
守り人

藤堂阿弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守り人

【Zコード】

N6736P

【作者名】

藤堂阿弥

【あらすじ】

何の前触れも無く異界にトリップしてしまった亞依。少しばかり普通とは異なった能力を持つた彼女が出会ったイケメンとの淡い恋のとつかかりの話です。（これは、以前運営していたサイトで掲載した話を加筆修正したものです。その点、ご了承ください）

—樹の陰—河の流れも多生の縁（前書き）

One Passionのスピノフ作品です。時代は少しばかり
未来の話ですが、別の話としても楽しんじただければ幸いです。

—樹の陰—河の流れも多生の縁

そんなに私飲んだかしら。

田向 亜衣の思考に最初に浮かんだのは、そんな言葉だった。

今日は友人と先輩と、友人の先輩って言う人達と一緒に飲みに行つて、居酒屋を出たとたん衝撃的なイケメンを見て、気力を奪われて、解散となつたのだが。

(「へ、どうだろ?」)

渡辺や佐藤と別れて角を曲がつたまでは憶えている。そういえば、すれ違つた相手に違和感を感じて振り返つたとたん、この場所にいたのだ。

この場所。右を見ても左を見ても岩だけ。俗に言つ洞窟らしき所。(しかも、向こうは明るいし)

入り口から差し込む光は、充分洞窟の中に届くものであつた。
SFなんかの設定ではありがちな話ではあるが、ああいった事と言うのはなんらかの前振りがあつてからの話である。

例えば扉の向こう、とかトンネルを潜つた先、とか。

いやいやいや。

思わず首を大きく振つて、その勢いでくらり、と体がぶらつくのを

慌てて支えた。

「ふつ」

突然聞こえた音。どう考へても、吹き出した声に慌ててそちらをむくと、逆光で顔は良く見えないが、洞窟の入り口にはいつの間にか人影が現れていた。

『ああ、失礼……』

少なくとも今まで自分が耳にしたことの無い言語。……しかし。

『申し訳ない。笑うつもりは無かつたんだが』などと言いながら、一向に笑いを収める様子の無い相手は、声から察するに若い男性のようだつた。来ている服装は、自分達が日常見るものとは異なつてゐる。

迷い込んだ先は映画のセットか、それとも……。

『と、失礼。しかし、どうやつてここに入ったのだ？見慣れぬ服装だが、この当たりに住んでいる者ではないのだろう？……それ以前に言葉は通じてゐるか？』

友人達の言つところの「超能力」はここでも健在だつた、といふことか。

「言葉は、解ります。……私の言つてることも、解りますか？」驚いた気配が伝わってきて、一歩近づいてきた相手に思わず息を呑んだ。

（う、わあ）

寸前のところで声を抑える。さつき見たイケメンといい勝負の美丈夫だつた。

『凄い』といつ言葉でしか表現できない相手を見たのはこれで二人

目だ。しかもほとんど時間を空けずに続けてみることができることで、ほんの数時間前には思いもよらなかつた事である。

背中まで届く黒い髪、紅玉の瞳。

年のころは二十代前半くらいだろう。中世の騎士のような服装に腰には剣。

背は高い。友人間で高い方の岸本よりも10cmは高い。2M近い。正直首が痛い。

その目の色を見れば自分とは異なる世界の住人だと解るが、全く気にならない。…カラコンなら話は別ではあるが。

それほどその色は男に良く似合っていた。

「ああ、申し訳ない。慣れぬ方にはこの目は氣味が悪いだろう」
「そんなこと無いです！とつても綺麗でお似合いです！」

間髪いれずに返ってきた返事に、驚きで目を丸くした青年は、やがて口元に穏やかな笑いを浮かべた。

「やつぱりこじだ

突然聞こえてきた声に、青年ははつとして、体の向きを変える。向けられた背中は大きくて安心できる。

ぼおつと、そんなことを考えながら、自分が庇われていると気が付いたのは、入り口から人が入つて來てからの事だった。

「グレイフォード伯？」

「ミリア殿：か？」

入ってきた相手の一人…女性が少し驚いた表情をする。

「どうしてここに…いえ、それよりも」

ミリアと呼ばれた女性は後ろの男に振り返る。一いちもまた郡を抜いての美丈夫だった。

（なんか、凄い男の人ばかり見る日だなあ）
呑気に考えている自分に正直驚く。実際パニクついても不思議じやない状況下なのだ。

「彼女…のかしら、アル」

「ああ、間違いない。しかし、驚いたな」

男が一步踏み出すると、青年は体の向きを少しずらした。いつそう深く亜衣を庇う形で。

「…ミリア」

苦笑交じりで男がミリアのほうを向く。同情するかのように軽く背中を叩いて、彼女は亜衣へと近づいて行つた。

「ご心配なく、グレイифォード伯。彼は私の連れです。…それより彼女と話をさせていただけませんか？」

「申し訳ない。彼女とお知り合いいか？」

「いいえ」と首を振り。彼女は亜衣へと向き直つた。

「ごめんなさいね。驚いたでしょ？」

穏やかな物言い。柔らかな笑顔。何故か懐かしいその気配に亜衣は緊張を解いた。

（…あ…）

ふ、と意識が遠のき、目の前が真つ暗になつた。慌てた気配と、身体を支えてくれる力強い腕。

それが、この場での亜衣の最後の記憶だった。

「よほど氣を張っていたんでしょうね。可哀想に」

青年の腕の中で氣を失っている垂衣を見て、ミリアが氣の毒そうに呟いた。

「何かご存知なのか？」

青年の言葉に、男と女は顔を見合わせる。

「…とりあえず、彼女をどこかに運びましょう。兄の屋敷でようじいでしょうか？」

「ああ」

そつと壊れ物を扱つかのように腕の中の少女を抱き上げた青年は、ふと気が付いたように顔を上げた。

「ミリア殿、申し訳ないが、私のことは名前で呼んでいただきたい」一瞬眉を寄せたミリアは、小さく溜息をつきながら首を縦に動かした。

「承知いたしましたわ、カーグ殿。…ああ、紹介が遅れましたね。彼はアルフォード、私の守護者です」

おお、今までで一番まともな紹介の仕方じやん。

嬉しそうに笑う男に一警をくれ、ミリアは洞窟の入り口へと足を向けた。

「日向。気をつける」

分かれ道に差し掛かる前に、突然渡辺が亜衣に声をかけた。

「気をつける…って、何にですか？」

時々、本当に時々ではあるが、この男はこんな風に言つてくる事がある。そして、それを無視すると、たいてい碌でもない目にあう。

「いや、妙な『卦』がでてる…上手く説明できない。すまんな」

「先輩にしては珍しいですね。そういう時の勘つて良く当たるのに佐藤も不思議そうな顔をした。過去に「女難の相」がでている」だの「怪我には気をつける」だの、親しい友人間にする忠告は外れたことが無い。

頼まれて占う」とはしないが、気が向けばしてもらえた忠告は、彼らの間での信頼度が高い。

「何時も言つているが、ト占は万能じゃない。久遠ならもう少しはつきりした事がわかるだろうが」

久遠というのは、渡辺たちの同級生の名である。外国籍の彼女は、母国に戻りそちらの大学に通つている。渡辺同様、人から頼まれても絶対にしなかつたが、ごくたまに気が向いたとき、仲の良い相手を占つたりすることがあった。

「出会い…の相、か。結構大きいものだと思つが、漠然としすぎてよくわからない、すまんな」

基本的に面倒”ことが嫌いな（そのわりには井上たちによく巻き込まれていたが）この男にしては、珍しい物言いである。流石に不安になつた亜衣の背中を佐藤が軽く叩いた。

「それで、先輩吉凶どちらですか？」

「難しいことつこてくるな。凶、じゃ無いことは確かだ。……しかし、吉かと問われると、微妙、としか言いようがない」

先輩にしては珍しく長い台詞だなあ。

そのときの彼女は呑氣にもそう思ったのだ。その後の事件など知るはずも無く。

とにかく、氣をつけろよな。

別れ際の渡辺の言葉を思い出す。

ですが、先輩。

亜衣は心中で呟いた。

氣をつけていてもビリジョウも無ことってありますよね。

気が付いた場所は、いつもの見慣れた自分の部屋ではなかつた。しかし、パニックに襲われることも無く状況判断を下した自分を誉めてやりたい。

映画や漫画、小説でしかお目にかかつたことが無い天蓋付きのベッド。回りを見回すとおちついた作りの家具の数々。柔らかな香りはハーブだらうか。この香りのおかげで随分気持ちが落ち着いた気がする。

氣を失う前に出あつた人達。

あの人達が先輩の言つていて、「出会い」なのだろうか。

ふと、紅い瞳の青年のことを思い出し、顔が熱くなるのを自覚する。

「無理も無い、あんなかっこいい人近くで見たのは初めてだから。それだけのこと。

ぶるぶると首を振つて、軽く頬を叩く。

「ふつ」

吹き出す音に慌ててそちらを見る。…なんか、前にもこんなことあつたようだな…。

「すまない…」一応ノックはしたのだが…しかし…」

くすくすと笑う声は止みそうに無い。同じパターンに、流石の亜衣もむつとして青年に向き直つた。

「何が、そんなに可笑しかったんですか?」

「申し訳ない」

謝りはするもののいつまでも笑つている相手に、溜息一つ零して亜衣はベットから降りた。

「カーケ?…あら? 気が付いたのね」

声がしてそちらを向くとミリアが入り口に立つていた。

「大丈夫?」

気遣う柔らかい声に、亜衣は彼女に感じた懐かしさに思い当たつた。

「つつかやん…」

「え?」

不思議そうに目を見開く相手に、慌てて首を振る。

「『』めんなさい。友人とよく似ていらつしゃつたので」

あら、と微笑んでミリアは亜衣に手を差し出した。

「光栄だわ。ね、お腹すかない？」

え？と思つた瞬間にタイミングよく鳴る笛。

「ふ」

青年が身体を震わせる気配がする。すでに諦めた亜衣とは対照的にミリアが驚いた顔を見せた。

「意外だわ…貴方がそんな顔を見せるなんて、ね」

はつとしたように笑いを収める相手に、ミリアは苦笑する。

「この国…少なくともこの屋敷に居る間は楽になさってください」

「お気遣い、感謝いたします」

青年の言葉に、彼女は深々と息を吐く。

「うわあ、軽いものを用意してあるから」

案内された部屋には、洞窟で出会つた男が茶の支度をしていた。

「よう、お嬢さん。気が付いたか」

勧められたソファに座ると、カツプを渡される。

「ハーブティだ。気持ちが落ち着くぜ」

礼を言つて、一口飲む。暖かな優しい味が身体に染み渡る。

出された手作りのクッキーやケーキはどれも優しい味がして、亜衣はようやく落ち着いた気分になる。

(このケーキもクッキーもつちやんの手作りの味に良く似ている)

ふ、と目頭が熱くなつてきて俯くと、静かに差し出された手があつ

た。

「こいつときは泣いた方がいい」

それまで亜衣の背後に立っていた青年は、その隣に座ると頭に手を置いた。

「気持ちは吐き出した方が楽になる」

ぽろぽろとこぼれる涙に困ったように笑うと、亜衣の頭を自分の胸に押し付けた。

堰を切つたように泣き出した彼女を、彼らは黙つて見つめていた。

「落ち着いた？」

ミリアに差し出された布で顔を拭ぐと、亜衣はほつとしたように力一クの胸元を見て慌てた。

「す、すみません！ 服濡らしちゃって…」

「いや、大丈夫だから」

布で自分の服を拭こうとする姿に青年は再び噴出した。どうやら、自分の一拳一動が相手のツボにはまるということに気が付いた亜衣は、大きく溜息を吐いた。

「ああ、いけない自己紹介がまだだつたわね」

男に代わって茶を入れ替えたミリアは、カップを差し出しながら亜衣に笑いかけた。

「私はミリア。ミリア・アークフイールド。で、こっちがアルフォード。アル、でいいわよ」

「…俺の紹介はそれだけかよ」

明らかにがっくりしている相手を横目に、ミリアは青年を指した。「で、彼が」

「サーク・ダグラス」

ミリアの言葉をひつたくるように青年が口を開いた。一瞬不審そうな顔をした彼女だが、すぐにそれを綺麗に消して亜衣の方へ向き直る。

「あ、亜衣です。日向 亜衣。こちらふつて言えばアイ・ヒムカイ、です」

「アイ…亜衣ね」

不思議と彼女が正しく発音してくれているのがわかる。これも例の『超能力』の賜物かしら、などと思つてみたりする。

「なあ、嬢ちゃん、お前さん言葉に不自由したことないだろ?」「突然言われた台詞に、はつとしたように顔を上げると、アルフォードがにやり、と笑いかけた。

「お前さん、やたら『言霊』に祝福されている」

言われたことの意味が解らずに居ると、男は暫く考えて口を開いた。「言葉とか、読み書きとか…自分の国の言葉以外も理解するのが早い、だろ?」

幼い頃から祖母が嘗む留学生相手の下宿屋で「言葉」に不自由することは無かつた。ある程度聞けば、理解することが出来るし、話すことも出来る。

それが尋常な事でないと氣付いたのはいつの頃からだつたろう。表向きには「それなりに」学んでいるように見せかけて、隠し通してきた。…黙つて受け入れてくれた、極少数の友人以外彼女の秘密を知るものは居ない。

頷く彼女にアルフォードは笑つた。

「誇るべきだ、お嬢さん。あんたの『えられた『祝福』は、稀有なもの。どんな形であれ、あんたの助けとなる」

同じようなことを言つた友人達を思い出し、彼女の口元に笑みが浮

かぶ。それを眩しそうに田を細めて見入つた男に、ミリアは田元を和ませた。

「けどなあ、それがあんたがここに来た理由にはならないんだよな」ふう、と男が大きく息を吐く。

「正直、俺にもわからないんだよ。俺が感じたのは、何かが空間を移動する気配、別の…俺が全く知らない世界からの来訪者の存在」それがあんただよ。

氣の毒そうな表情のアルフォードに、亜衣は訊きたくはないが訊かなくてはいけない質問を恐る恐る口に出した。

「じゃあ、私が元の世界に戻れる、っていう確立は」「限りなくゼロに近い」

「アル！」

瞬時にミリアの叱責が飛ぶ。だつてよーと、アルフォードは言葉を続けた。

「事実は事実として、ちゃんと言つてもすべきだと俺は思つぜ?」「言つている事はもつともだけどね…そんなに一边に話さなくても」

とん、と背中を叩かれて、そちらを見るとカーラの心配そうな顔にぶつかつた。

「大丈夫か?」

そつと握られる手に、安心感を憶えて、亜衣は小さく笑うと頷いた。「悪いな、気休めも言つてやれなくて…とりあえず、知り合いに声をかけておいたからよ。あんたの世界の気配。見つけたら知らせてくれるはずだが…そういう意味では世界は広いからなあ」

「え、と『パラレルワールド』ですか?」

一瞬きょとん、としたアルフォードだったが、すぐに「ああ」と頷いた。

「あんたたちの世界じゃそういうんだな？すこしづづれた次元の世界のことを」

博識さを披露した男は、知らぬ言葉に苦笑する。

「とりあえず、こちらの世界では私が面倒を見るから安心して」「え？ そんな…あ、でも、できるだけのことは自分でしますから」とミリアは笑う。

「ここ」の世界に慣れて、落ち着くまで、ね。身の振り方はゆっくり考えればいいわ。どちらにしろ私達も暫く王都にいなきやならなくなつたし」

溜息交じりの言葉に反応に困った亜衣に、ミコアは「めんなさい」、何でもないの、と小さく笑つた。

「で、貴方はどうなさるんですか？ カーク」

「ああ、私はどこかに宿でも探すから心配はいらない」

青年の言葉にミリアは眉を寄せて再び溜息を吐いた。

「…そんな事を自分の留守中にさせたと知られたら私が兄に叱られます。義姉と子供達を里に送つて行つただけだと聞いていますから、すぐに戻つてきますでしょう。少なくともそれまではここに御留まりください」

ふと言葉を切つて、彼女は意味有りげな笑いを浮かべた。

「『安心ください』。リュクレオン様にこちらから接触するつもりはありません。もつともあの方のことですから、すでに私達の居場所もあなたの事も把握はしていらっしゃるでしょうけど」

「それでは、『あの噂』はまことなのですか？」

カーキの言葉に、彼女は笑う。寂しそうな、悲しそうな笑顔で。

訳のわからない話ではあったが、立ち入つてはいけないと感じ亜衣は黙つて彼らを見ていた。

ミリアがこの国…宰相リュクレオンの想い人で、彼から逃れるために遠い地に住んでいると彼女が知ったのは、それから暫く経つての事である。

「亜衣、お家の都合で暫く休むつて」

突然の秀子の報告に、彼らは一斉にそちらを向いた。

「暫くつて…どのくらい?」

「お母さんの話じや、近いうちに休学届けを出しに行くつて事だつたから、相当な日数なんじやないかな?」

「なんだ、それ?…俺達に一言も無しにか?」

「あ、お母さん謝つてみえた。急なことだつたから、昨夜そのまま行つたらしいの。…事件とかそういうのじやないみたい。普段どおりのお母さんだつたから」

後半はミステリーファンの中込に向けての台詞である、すぐさま「そこまで考えていない」との返事が返ってきたが。

「向こうが落ち着いたら連絡させるつておっしゃつていたから…心配だけどお家の事情じや仕方ないよ」

いまいち納得できない表情で皆が頷いて、その話はそこで終わりとなつた。自分に向けられた視線に微かに頷いた律は、立ち上がる。

「じゃ、バイトの時間だから」

「あ、うん。また明日」

手を振つて去つていつた友人を見送つて、秀子はもう一人姿を消していることに気が付いた。

「あれ? 佐藤は?」

「あ? 帰つたぞ。『家に帰つて和算を解いた方が有意義だ』だ、そ

うだ

「うわ、いかにも佐藤らしい」

苦笑しながら、彼らも帰り支度を始めたのであつた。

「さて」

後輩二人を目の前に、悠然と紅茶を飲む男を佐藤は軽く一睨みして口を開く。

「浅野の口を借りましたね？俺達にまで『呪』を掛けようなんてどういうつもりですか？」

「元々お前達に『呪』は効かん」

どうだか、と佐藤は小さく呟く。同級生から先輩へと視線を移し、律は顔を上げた。

「亜衣に何があつたんです？」

言葉を飾つても仕方が無いと判断して、单刀直入に聞いて来た後輩に渡辺は苦笑を見せる。が、すぐにその表情を曇らせ大きく息を吐いた。

「消えた」

「「はい？」」

カップをソーサーの上に置き、ソファに身を沈めると、男は再び溜息を吐く。

「それこそ、忽然と…足元にぽつかり穴が開いたみたいに姿が消えた」

「神隠し、みたいなものですか？」

この男を始めとする人物たちと関わるようになつて、こういうオカルトめいた話に慣れてきたとはいへ、自分の友人が…特に彼らとも深い関わりの有る友人がその対象となると、理不尽とは解つていても怒りがこみ上げてくる。

「今日は俺達絡みじゃない」

目の前の後輩二人は疑わしそうな表情を渡辺に向ける。無理も無い、自分達のごたごたに巻き込んで一つ、間違えれば命さえも危ぶまれるような状況に落とし入れたことの有る相手である。はい、そうですかと、信じてもうには、自分も、自分の周りにも前科があります

ぎた。

「部屋に戻つてきたら、久遠から留守電が入つっていたんだ。『日向を探してくれ』ってな。ほんの小一時間前まで一緒に居た相手だ。…正直別れ際に見えたあいつの『卦』も気になつたから追いかけてみた。が、ある場所を最後にぶつりとあいつの気配が消えているんだ」

そう言って、青年は悔しそうな表情を見せる。状況こそ違うが、3年ほど前にも彼の親戚筋の少女が『神隠し』にあつているのだ。

彼女は未だ発見されていない。

すっかり冷め切つた紅茶を口にして、渡辺は眉を顰める。その様子に気が付いて律が立ち上がる。

「久遠に言わせると『偶然の産物』なんだそうだ」
入れ直した紅茶を葎が持つてくると、渡辺は再び口を開いた。
普段説明を主にする青年がここに居ないのも珍しい事であるが、今
の彼らにそこまで気遣う余裕は無い。

「だからこそ厄介なんだ。人為的な何かが働いていれば、それを施
行した相手を探つてこっちも動ける。だが、偶然はそうはいかない。
それこそ、あと1cm違つたら落ちなかつたかもしない落とし穴
に落ちて、そのまま別の次元に行つたつて事だ。探そるものにも、
手立てが無い」

「世界は人の思考の数だけ。分かれ道の数だけあって、ひたすら増
え続ける、でしたっけ？」

「極論だけどな」

そつと紅茶に口をつける。彼女の入れたお茶はいつも丁寧で美味しい。

「俺も久遠も手を尽くす。手を尽くすが…可能性は低い」
3年前もそうだった。あの時はもつと多くの術者が手を尽くして見
つからなかつたのだ。

突然聞こえてきた声にはっと振り向くと井上が壁にもたれて立つて
いた。
「…いついらつしゃつたんですか？」
「ん？最初からいたよ。隣の部屋で寝ていただけで」

爽やかな笑顔を見せる相手に、佐藤と葎は顔を見合わせる。

お茶を入れに行つた葎を見送つて、渡辺の隣に腰を降ろすと井上は友人の背中を軽く叩いた。

「見えた『卦』をもつと氣にしていたら、なんて後悔は止めるんだね。後輩ばかりではなく、親友まで行方知れずなんて状況は『免蒙りたい』

その言葉に、佐藤がはっと顔を上げる。あの時、自分もそこにいたのだ。渡辺の言葉に重点を置いて送つていけば、こんなことにはならなかつたかも知れない。

「ああ、こつちにも落ち込んでいる男が居る。…同性を慰めるのは趣味じやないんだ」

溜息をついて、井上が口を開く。いつもより疲れているその様子に、後輩達は彼もまた亞依を探すために奔走していたのだと氣付く。だから今まで顔を出さなかつたのだろう。

「いいかい？久遠の言葉じやないけど『偶然の産物』なんだ。送つて帰つたところで、ひょつとしたら自宅で起きたかもしれない。下手をすれば、大学で皆の目の前で、多くの人を巻き込んで起きたかもしれない。『もしも』なんて考えていたらキリがないのだよ？」
紅茶を持って来た葎に礼を言って、青年は友人達に小さく笑いかけた。

「僕らができることは、祈ることだ。日向さんの無事をね。そして、出来る範囲で動くことだ。違うかい？」

綺麗事かもしれないが正論だ、と佐藤は思つ。こいつやって相手を煙の巻くのが彼のやり方ではあるのだが。

「亜衣の『超能力』が健在だといいけど」

「大丈夫さ、あればつかりは無くならない」

「ああ、でも」

ふ、と何かに気が付いたように井上が笑う。：「こういう笑顔を見せるときの彼は、たいてい碌な事を考えていない。

「今度会ったときに、よぼよぼのおばあさんの日向さん、つてのも嫌だね」

逆も嫌だけどね。

楽しげに言つ青年に、頭を抱える彼らであつた。

所変われば木の葉も変わる

ミリアが教えた知識は、この国で必要な最低限のもの…つまり、子供でも知っている、とこつ程度のものであった。

「だつて、無理に詰め込んで仕方ないでしょ？」「

彼女の話の合間に、アルが雑学的な事をはさんだり、時折一緒に話を聞いているカーサクが別の視点で質問をしてくれていたおかげなのか、数日のうちにあえずこの国で暮らすには問題ない程度の知識はついていた。

数字の動きが日本と同じ十進法だというのも助かった。基本的な常識も大きな違いは無い。

一番の大きな違いは文明の発達の程度であろう。時代背景でいえばヨーロッパの中世に一番近いものがある。

一度それを口に出したとき、ミリアとカーサクがきょとん、とした顔をしたのに対して、アルフォードが苦笑を見せた。

「機械文明ってやつだらう？」これはそういうのは発達しないからなあ」

どうして知っているのかの問い合わせには、「俺つて博学だから」との一言で片付けられてしまった。謎の多い男である。

謎が多い、といえばカーサクも同様で、ミリアは彼とは古い付き合いのようであつたが、どうやらこの国『ワトワ』とこつ名前前の国なのだが、の住人ではないようだつた。

「え? ジャあ、ここの主人さまは貴族ではないんですか?」

侍女頭のサラを手伝つて部屋の掃除をしていた亜衣は驚いたように声を出した。

とりあえず、亜衣のことはミリアが住んでいる所の近くの村から行儀見習いにやつてきた娘、といつ事になつてゐる。

教えてもらつた身分制度や屋敷の広さから、てつくり身分の高い家柄だと思つていた亜衣は、意外な言葉に目を見開いた。

ちなみに、彼女のもの知らずさは「田舎の出身だから」で片付いている。そんなおおらかさを持ち合わせている屋敷の住人達であつた。

「ええ、サイラスさまは実力で今の地位を築き上げたお方なんです。無くなつたお方様…サイラスさまのお母様も同じで、ご自分の実力で富廷つきの薬師となられました。ミリアさまも充分実力をお持ちなのですが、の方は王宮がお嫌いですから…でも、もう少し近くにお住まいになられてもいいと思うんですけどね」

近衛隊長も兼任している将軍職のイメージは相応の家柄 貴族でも伯爵以上 でなくてはならないと考えてしまつ辺り、自分もファンタジー や歴史書に影響されていると苦笑してしまう。
もちろん立身出世ものだと下克上とかも考えに入れないわけではないが、ある程度平和が続く国では世襲制が一般的な考え方ではないのだろうか?

「爵位とかならともかく、將軍職はね実力主義なのよ、この国では」

彼女の疑問は、ミリアにあつさり解かれてしまった。

「それほど平和な国でもないのよ……ああ、国内ではなく、外交的に、ね」

「外交的にですか？」

「そう。今のところは、隣国のリュグラーンと友好的な状態にあるからそうでもないけどね」

それまでしていた刺繡の手を止め、彼女は亜衣に向き直った。

「まあ、たまに……何代かに一度問題はおきても、リュグラーンは隣国つて事もあってわりと友好的な方よ。婚姻関係も結んだりしているし、今の陛下も……」

そこでふと言葉を切り、ミリアは亜衣を見て微笑んだ。

「百闇は一見にしがず、つて言つわね。アルをつけるから『市場』でも見てくる?」

何を持つて『百闇は一見にしがず』なのだろうかと考えていると、軽いノックの音がした。

応えの声と共にカーグが入ってきたのは、偶然か、はたまた運命か。「ミリア、アルからの伝言だ。『悪いが急用ができた。暫く留守にする』」

「あら、そう。ありがとうございます。……ああ、そうだ、カーグ」

出て行こうとした青年を呼び止めて、ミリアは笑顔を見せた。

「時間があるなら亜衣を市場に連れて行つてもうえませんでしようか?」

「ミリアさんっ!？」

一瞬目を見開いた青年は、少し考える仕草をして頷いた。

「構わないが、どうして急に?」

「そろそろ街の様子を知るのもいいと思いまして。私が付いていつてもいいのですが、殿方に付いて行つて頂いた方が安心ですから」治安のいい都市とはいえ、どこにでも悪い人間は居る、といふこと

だ。こここの使用人たちでも構わないが、丁度来たカーサに白羽の矢が立つたのだと、ミリアは付け加えた。

「では行こうか？ちゃんとエスコートするから安心したまえ」
普段は生真面目なこの男だが、親しくなった相手にはこういったふざけた言い方もする。初めの頃はミリアたちに対して敬語を使っていたが、今では普通に話している。

そういう意味では亜衣に対しては最初から気を許していたような感じがあった、と二人を送り出してミリアは考えを巡らして小さく笑った。

国王の叱責が功を奏したのか、一時引きこもっていた宰相も今では政務に復帰し、その手腕を生かしている。

しかし、未だ妻を娶らずにいるあたり、彼の頑固さを示していた。あの男にはあの男なりの言い分と生き方があるのだろう。それに口を出すつもりも、そんな権利もない自分に何がいえるのだろう。

とりあえず、今の自分が考えるべきことは別にある。
自分が王都にいる本来の目的を思い出し、自分も外出すべくミリアは立ち上がった。

縁は異なるもの味なもの

市場を見た亜衣の印象は「やたら大きな商店街」だった。

通りをはさんで左右に並ぶ店舗。それこそ、食料品、衣料品、ここに来れば何でも揃つだろ？

カーケに言わせると時間的にずれているため人通りは少ないほうだというが、それでも十分多いと思う。

活気があふれ、笑顔と共に大きな声が飛び交っている。

百聞は一見にしかず、そう言つたミリアの言葉が何となく判つたような気がした。

確かに大きな豊かさは無いが安定した国。人々が笑つて暮らすことができる国。

それが、この『トワ』だった。

「常にこんな風に笑つていたわけではないんでしょうけれど」
呟くように紡ぐ亜衣にカーケは視線を落とした。

「『冬の季節』を乗り越えた強さがある国なんですね」

その言葉に男は少し驚いたように目を見開き、すぐに表情を緩めた。

この少女は聰い。そして強い。

何も知らぬ世界に一人で来て不安が無いわけがない。しかし、それを乗り越え前向きに進もうとしている。誰に甘えることなく、自身の足で立とうとする姿に、羨望さえ感じた。

その上、周囲をちゃんと見ていく。

考えてみれば彼女は初めて会ったときから不思議な存在だった。自分の出自や立場上、めったなことで人に心を許すことはないのに、

彼女は最初から自分の心の中にすんなりと入ってきたのだ。

王家の墓の洞窟で、一人百面相をしている彼女を見た時、普段の彼なら警戒し、自ら姿を見せる愚行は起こさないはずなのに、気がつけばその一挙一動に自然と口元が緩んでいたのだ。

ミリアやアルフォードが現れた時も、自分の背中に庇うなどと今までの自分では…いや、今の自分でも起こさない行動を起こしていた。…見ず知らずの相手に背中を向けるなど（それが、何の力のなさそうな少女だとしても）どれほどの危険が伴うか、誰よりも承知していたはずなのに、自然と身体が動いていた。

目が離せない…離したくない。

そう考えている自分に気がついて、カーキは我に返った。

彼女はいつか自分の世界に帰つて行く者。そして、自分は…。

思わず、自嘲してしまう。何を考えているのだ、と。

「アイ」

呼ばれて振り返った彼女は目を見開いたが、すぐに花が綻ぶような笑顔を見せる。その表情を見て青年も同じような表情をした後、緩やかに口の端を上げる。

差し出された手に一瞬の躊躇いを見せたものの、すぐに自分の手を重ねた彼女に目を細め、カーキはゆっくりとした足取りで巫衣の中へと誘つて行つた。

きつと無自覚なんだろ? な。 そう彼女は考える。 初めて呼ばれた名前が耳に心地よい。

誰に言われた訳ではないが分かる。 青年の一挙一動は洗練されたもので、 決して付け焼刃ではない自然な動きをしていた。 屋敷の人たちも、 以前からの知り合いらしく自然と敬意を持つた接し方をしている。

こうして街中を歩くにしても、 さりげなく自分を守りながらエスコートする動作が自然で板についていた。
そして、 初めて会った時のミリアの一言。

(グレイフォード伯： 伯爵さま、 かあ)

心中で亜衣は溜息をついた。 何か気配を感じたのか振り返る青年に笑顔を見せると彼も笑い返してくれる。 それだけで心の中が温かくなつた。

(身分もだけど次元も違う人相手じゃ、 ね)
でも想うだけなら自由だものね。

行きかう人々が彼の容貌に振り返る。 娘たちが頬を染めて彼に見入る。 しかし、 当の本人は慣れているのか気にする様子もなく進んでいく。 しつかりと握られた掌が温かかった。

折に触れ自分に声を掛け、 何かと気遣ってくれるのはやはり一番最初に出会った故の責任感なのだろう。

そう自分に結論付けて彼女は青年の導くまま市場の雑踏に飲まれていつた。

「なんと…まあ」

闇より深い闇の中、しかし、其の闇に飲まれることなく男はそこには居た。

上も無く下も無い。ひたすら虚無が広がるそこで緩やかに虚空を見つめながらアルフォードは小さく笑う。

「可愛らしいものだ」

ミリアの傍に居る彼を知るものが聞いたら自分の耳を疑つたであろう。それは普段の彼から想像もつかない冷たい声音だった。

「『呼ばれ』たか、はたま『仕組まれた』のか」

彼女は男に言つたのだ。果たして二つとも『偶然』と呼んでいいものか、と。

「百歩譲つて亜衣が次元移動に『偶然』巻き込まれただけ、だとしても」

傍らに立つアルフォードに視線を向けてミリアは言葉を続けた。

「彼女がこの『次元』に、しかも王家の墓に『落ちて』しかもカーキに出会つた。…それを偶然と片付けていいのかしらね？」

「だがな姫さん。あの移動に作為は見つからなかつたぜ？ そういうたやりかたをすれば必ずどこかに痕跡が残る。例えば道を歩いていて、自分が『綺麗』だと感じて花の種を拾つて、どこかに蒔いておくのと、道を歩いていて服にひつっていた種に気づかず、そのまま其の種が道に気がつかないうちに落ちていた、って言つべからいの『差』があるんだぜ？」

「『次元を越えて』『いちらの世界』へ来ることが出来るほど力を持つ妖魔は少ない』そう言つたわよね、アル」

それはずっと以前に男が彼女に教えた事。

「そして、『実際に越えて来る物好きは尚少ない』とも」

ふと言葉を切り、考えるような仕草をして口を開く。

「お仲間、とは限らないかもしけないけど」

「流石は我が姫」

深々と頭を下げる男の口調ががらりと変わるが、ミリアは驚きもせず視線を元の刺繡へと移した。

アルフォードがカーサーを通じて伝えた伝言はここに端を発していた。

「厄介といえば厄介な相手なんだが」

言葉の内容とは裏腹に酷く楽しそうに男は言つ。

「そこまでの力の持ち主なんざ『アイツ』くらいだろうしな

独り言を呟きながら、男は深遠の闇へと一歩踏み出した。

闘う雀人を恐れず

「あ～あ、見つかっちゃった」

「見つかっちゃった、ではありません」

市場を回っていた途中、はつとしたように顔を向けた先へ、突然手を離して走り出した相手を懸命に追いかけていくと、食堂のような建物に居た人物が苦笑を向けてきた。

「すまないね、大丈夫かい？」

男の言葉にはつとして、カークが振り向けば、息を切らした亜依が頷く姿が目に映る。

「座つて、ほら君もだカーク。店の邪魔になる」

立ち上がると、さりげない動作で亜衣をエスコートする青年は、呆れた笑顔をカークに向かってた。

「どうせ、私に気がついて全力疾走してきたんだろう？ 短距離だからよかつたものの、同行している人がいる時はそんなことをしてはいけないよ？」

「へ…ガイゼルさまだけには言われたくない言葉です。すまない、大丈夫か？」

そんな様子を見て、ガイゼルと呼ばれた青年は目を細めた。

「嬉しいな。カークが女性を気遣う姿を見ることができただけでも、今回は良しとできるかな」

「ガイゼルさま」

深々と息を吐くカークに笑いかけると、青年は亜衣の方へと顔を向ける。

「私は彼の上司で従兄弟でもあるのだが、こんな風に女性を扱うと

ころを見たのは初めてなんだ。だから、嬉しくってね。…失礼、お名前を伺つてもかまわないかな？私はガイゼルというのだが」

「あ、日向 亜衣…アイ・ヒムカイと申します」

カークの上司ならば、それなりの地位にいるものであらう。そう判断して亜衣は居住まいを正した。

息を整えて改めて相手を見ると、青年が視線に気付き柔らかな笑顔を向けてくる。カークといい、アルフォードといい、イケメンに遭遇する確立が高いなあ、としみじみ思う。真っ直ぐな銀糸の髪と琥珀色の瞳は楽しそうな、というより面白がっているようにも思えるが。

浮かべた笑みを深くすると青年はカークに向き直った。

「できれば、セリアルの顔くらい見たかったのだけどね」

「リュクレオンがいつまでも見逃してくれるなんて考えていらっしゃらないですよね？」

米神を引きつらせながら言うカークを見て亜衣は少し驚く。彼女の知る彼はいつでも大人で穏やかな態度を崩すことの無い相手だった。

少しカークに近親感を覚え、彼女は柔らかく微笑んだ。

そんな彼女の表情に青年たちはそれぞれ違った顔を見せる。

片方は嬉しそうに、もう片方は恥ずかしげな笑いを浮かべた。

「とりあえず、我々が世話になつてている屋敷へ行きましょう」

「お前の従兄弟の屋敷ならお断りだよ」

「へ…ガイゼルさまの従妹殿のお屋敷です」

「ほお、と青年の目が見開かれる。

「ミリアが王都に来ているのか？珍しい」

この青年はミリアの従兄でもあるらしい。しかし、あの屋敷でカークと彼女に血縁関係があると聞いたことが無いことに気づく。

そんな考へが顔に出たのか、ガイゼルは「ああ」呟いて、亜衣へと顔を向けた。

「私の父と彼女の母上が兄妹でね。カーケの父君と私の母が姉弟なのだよ」

説明を聞いて亜衣は頷く。つまりは姻族、といつ事らしい。

「サイラス殿がお留守で良かつたです」

「おや、サイラスが留守とはこれもまた珍しい」

「奥方様がご懷妊でお里に送つていらつしゃつているそうです」

それを聞いてガイゼルの目が細められる。

「ばれていますか？」

「当然でしょう。でなければ、リュクレオンが黙つて『いるはずあります』

仕方ないなあ、と青年は立ち上がり勘定を済ませた。

「（）は私が、とは言わないのだね？」

「当然です。部下に支払いをさせる上司なんてお断りです」

酷い奴だよね、とガイゼルは亜衣に向つて苦笑する。くすくすと先ほどから笑う彼女に青年は好感を持つた。

自分が肝心なところで蚊帳の外に置かれていることを知りながら余計な口を挟まない。好奇心は表情に現れはしても、説明のない会話に割り込むことも、無視されることに對して負の感情を見せることも無い。

（これはこれは）

少なくとも自分たちの周りには居なかつたタイプだつた。……この場合、ミリアたちは除外されるが。

（カーケには新鮮だろ？）

生まれ持つた容姿故に、いわれの無い中傷を受け、かと思えば突然掌を返すように接してきたものもいる。

彼らの周囲にはそんな人々が大半を占めていた。

大幅な改革をし、綱紀を改め、ようやくここまでできたのだ。とはい
え、受けた傷が癒える訳ではない。

ふと、不穏な気配を感じ立ち止まる。すでにカーグは剣に手を掛け
周囲をうかがっている。

街から少し離れた雑木林の中に彼らは居た。

「引き込んだね」

「申し訳ありません。人通りの多いところで騒ぎを起こしたくはな
かつたので」

何が起こっているのか状況をつかめていない亞衣をガイゼルはそつ
と傍に寄せた。するとすぐ近くから静かな殺気が漂ってくる。

「大人気ないよ、カーグ」

「日ごろの行いの賜物かと」

軽口を叩き合つてはいるが、常に周囲を伺つてはいる一人に、漸く亞
衣もただ事では無いと気づいた。

「大丈夫だ」

紅玉の瞳が微かに細められる。

「ちゃんと守るから」

「…おやおや、私よりも彼女が優先かい？」

「当然です。」自分自身も守れないうつの方では無いと存じ上げておりますゆえ

その言葉と同時に剣を向き放つと、木の上から降りてきた相手の剣を受けて流し、そのまま反すと、賊の胴へと流れるように動いた。

ぞしゅり。

剣が肉を切る音と共に血が飛び散った。

「君が見る必要は無い」

亜衣のまぶたを大きな手が塞いだ。

「だが、覚えておいて欲しい。彼も好き好んで剣を振っているわけではない」

剣の音と血の匂いがあたりに充満する。吐き氣にも似た感覚が亜衣を襲つた。

ふと、ひゅん、と何かが空を切る音がして、すぐ傍でどさり、と物が倒れる音がした。

「うめき声一つも上げぬか。訓練されたものだな」

そう呟いて、傍らの男は「目を閉じていなさい」と亜衣に囁く。それに微かに首をふる動きが返ってきた。

「これが『ここ』の現実ならば私は見なくてはいけません」

細い声であつたがカークとガイゼルに届くには十分な聲音。

「動かすにじつとしていますから、ガイゼルさま」

亜衣の言葉に青年は目を細め軽く抱き寄せた。その途端、はつきりとした殺意が彼を襲つ。

「だから、大人気ない、といつのだよ」

ふわり、と笑つて青年は一步踏み出した。声も立てず襲つてくる賊を一太刀で倒す。

でも、と亜衣は思う。

怖い、確かに怖い。周りに倒されて動けずにいる賊たちの数も一桁になろうとしている。こんな多くの敵を、この一人だけで倒したのだ。彼らがとても強く強い事が分かる。

と、彼女の目の端に何かが映った。それが何かは分からないがガイゼルに向っている事だけは分かる。

その思考は一瞬。何故動けたのか後になつて考えても分からない。はつと気づいたカーサークが振り返った時、矢の軌道はガイゼルを庇うように進み出た亜衣へと向っていた。しかし、賊もカーサークに動く隙も、『発動』させる隙も与えなかつた。

「亜衣！」

かしゃん。

はつと気づくとそれは彼女の寸前で止まり、落ちていた。
そして、亜衣の傍らにいるのは真っ白な犬…ではなく狼。

「ほ…むらっ？」

震える声で名を呼ぶ亜衣に、獣は嬉しそうに尾を一振りした。

突然現れた生き物に敵も味方も一瞬の隙が出来る。その隙を縫うよう、白い獣は跳躍すると彼方の射手にたどり着き、その口を噛み砕き、亜衣の下へ戻る。

その動きは普通の獣ではありえないスピードであった。

「引け！」

リーダーらしき人物が低く呟くように退却を命じると、あつとこう
まに『襲撃者達は去つていった。

「ほむら？本当にほむらなの？」

膝をつき、恐々と白い獣に手を伸ばすとほむらは嬉しそうに亜衣に
すりよる。

「なんとか間に合つたみたいだな」

「アルフォードさん！？」

よ、と片手を上げてアルフォードは亜衣の傍に現れると、その周囲
を見渡して眉間に皺を寄せた。

「…自害しちまつているな」

その言葉に、ガイゼルとカーグが調べて暗い顔をする。

先ほどまで微かではあるがあつたはずの命の光が消えている。

「亜衣っ！」

その声を最後に亜衣の意識は暗転した。

柳に雪折れなし

王都に……いや、王宮に通う限り避けては通れない道だとしても出来るだけ先延ばしにしたかった事の一つが、この男との邂逅だった。

自分に気が付いて向つてくる青年の姿に、心の中で小さく息を吐いて、ミリアは通路の隅により頭を下げる。

王都、いや国内でも筆頭に上げられるであろう美丈夫は彼女の前で立ち止まると優雅に一礼した。それは一国の宰相という地位に居る男が一介の薬師にする『ソレ』ではなかつた。

ここが王宮の、しかも極限られた者しか入れない区画でなければ彼女は近くに居る衛兵に捕われただろう。

それを承知の上で、そういうた態度に出る相手の性格に微かに眉間に皺を寄せる。

「ご無沙汰しております。お元気そうで何よりです」

静かで柔らかなトーンの声は確かに外交面において大きな効力を發揮する。しかし、彼の普段の声音は『氷河の上を渡る北風』と、まで言われるほど冷たい。…極めて稀なごく一部の相手を除いて。

その極一部に、ミコアも含まれてゐる。

「閣下もご健勝で喜ばしい限りでござります」

深々と腰を折りミリアは応える。にっこり微笑んでいてもその瞳に欠片ほどの笑いは無い。

けれど、ふとその瞳に映った相手の表情を見て「おや?」と首を傾げる。以前の彼とは違うその光は、幼い頃自分に向けられていた『

それ』に近い。……いや、それよりも……。

しかし、彼女が『それ』に気付くよりも先に、視線の隅に映った人影が彼女を現実に戻した。

限られた一部しか入れない区画、といつのは返せばほほ顔見知り、事情通の人物のみがいるということで、この時運悪くここを通ったのは他ならないこの国の王であった。

この一人に気づいて回れ右をしようとした男に、ミコアの目が細められる。

「陛下」

ぎくり、という擬音が当てはまる動きでシュヴァルツは振り返る。静かに腰を折った薬師は国王に向けた打って変わった笑顔を、国王の後ろに控えていた男へと向けた。

「いわげんよう、ティギオンさま。兄がいつもお世話になつてあります」

この場合の『兄』は誰のことをさすのか、とふと頭の中をよぎりはしたが、そんな事はおくびにも出でず、近衛の副隊長は胸に手を置き軽く会釈を返した。

「あ～後の様子はどうかな？」

この場を取り繕うように言う国王にミコアは優雅に微笑んだ。

「お変わりございません。妃殿下も、お腹にいらっしゃる御子もつがなくおす」じです

その言葉に、ほっとしたようにシュヴァルツは息を吐く。

彼女が王都にやつてきたそもそもの理由がこれであった。

普段自分の願いや我慢を言つことが無い王妃が分かつてから願つた唯一のこと。それは、女性の薬師を呼んで欲しい…せめて、出産が済むまで、傍で相談できるのが同性であつてほしい、と。

そうなると必ずと人選は限られてくる、といつより国王やその側近に「是」と言わせる女性の薬師など、トワの国内広しといえど唯一人。

隠された存在ではあるが、この国の王女であり、近衛の将の義妹でもある、目の前の人。

遡る事一〇日前。

「いいですけどね」

迎えに来た義兄に呆れたよつミリアは言つ。

「ただし、専用通路を使わせてくださいね」

それが、彼らがいるこの回廊の事であった。正門や下々の使う門ではなく、極一部の者たちだけが緊急時に使う場所。

まさか、そこでできれば会うこと避けたかった人物の一人共に同時に会うなどと、ついていないもほどがある。

一人心の中でミリアは咳く。

「それでは、失礼いたします」

最上級の相手に対して使う礼を国王と宰相にして、ふと思い出したように彼女はリュクレオンに近づくと一言二言囁く。その言葉に宰相の眉間に微かに寄つたが、すぐに何事も無かつたように軽く一礼した。

「承りました…ああ、私からも一つようしいですかな?」

「何か?」

リュクレオンはシュヴァルツ達のほうを見、彼女に視線を移す。

「セリアルの求婚者が国内に入ってきております」

「やつぱり…」

頭を押さえて国王の方を見ると困った笑いを浮かべている。つまりは承知済み、という事だ。

「だから『彼』が来ているんですね」

近衛の副隊長も同様の表情を見せていた。

「兄が奥方を里に送つていつたというのは…」

「事実半分、搜索半分、ですね」

軽く眉間をおさえると、ミリアは軽く腰を折る。

「では…」

「姫君」

去ろうとするミコアにリュクレオンが声を掛ける。

「例え何があるとも、貴女が私にとって唯一の姫君である」とこの変わりはないぞいません

これを聞いたのが、貴族の…いや、一般女性であれば、頬を染めて喜んであろう言葉。そのままの素直な意味に 貴女は私にとって唯一の『女性』です なつただろうが、この場合言われた者と、周囲にいる者は違つ意味で捉えるしかない言葉だった。

『女性』ではなく『姫君』この言葉が持つ意味合いの違いを語った本人が気付いているかどうか。

一瞬何か言いかけて口を閉ざしたミリアは大きく息を吐いた。

「お好きになさいませ」

これには、周りに居た男性陣、言われた当のリュクレオンさえも驚

きの表情を見せる。

「ただし、わたくしが認める守護者も唯一人、ということを覚えて
おいてください」

再び優雅に腰を折ると、ミリアは去つていった。

「…驚いたな」

その場に暫く動けずに立つていた国王は息を吐く。

「アレにしては最大限の譲歩だぞ？」

「確かに、今までのミリア殿では考えられないお言葉でしたな」
リュクレオンをみると、彼は小さく唇を上げ彼女の去つた方角を見
ている。その眼差しに、懐かしいものを覚えシユヴァルツも目を細
める。

国王の視線に気が付いて、苦虫を噛み潰した様な顔を見せた宰相で
あつたが、彼もまた深く頭を下げる。

「どうした？余に用があつたのではなかつたのか？」

王の顔となり、リュクレオンに声を掛けると、彼の唇が先ほどとは
違う上がり方をする。それは、国王と傍仕えの者がよく知る顔でも
あつた。

「我が姫がネズミ退治をお命じになりましたので、先にそちらを済
ませてまいります」

シユヴァルツとティギオンの気配が変わった。ソレを見て、宰相は
身を翻す。

「…しかし、全く」

執務室に戻った国王はティギオンに苦笑いを見せた。

「お前の上司の妹はどこから情報を仕入れてくるのや？」「

「…あのお方は王宮の深層部に携わっておりででしたから、そちら

からかと」

王室付きの薬師は、表向きの奇麗事ばかりに携わっているだけではないのだ。普通なら暇乞いなど許される立場では無い彼女にそれが許されたのは、国の重鎮が彼女の出生を知るからこそ。

「出来うることなら、これ以上厄介ごとが増えて欲しくは無いな」
そうこうと、どうやら国王は自らの執務をこなすべく目の前の書類を取り上げ、近衛の副隊長は扉近くの定位置へと向った。

「厄介事、ね」

小さく笑うその姿に、アルフォードは息を吐ぐ。

「誰だよ、それを呼び込んだのは」

心外だなあ、と彼は笑う。

「呼び込んだつもりはないよ？」

「他の次元から拉致してきた奴が何を言つ」

目の前の青年は、その空間から立ち上るとアルフォードの目の前にやつて来ていたずらつぽい笑いを浮かべた。

「それにしても、君の姫君は勘が良い。もてるはずだ」

「どうするつもりだ？」

青年はやれやれと肩をすくめると、何も無い空間を指差す。そこに

映つたのは、アルフォードが目とした事のない世界だった。

「本当に偶然だつたんだよ？彼女をひっかけちゃつたのは。だから、すぐに元の世界に返すつもりだつたんだけどね」

見ちやつたんだ。と彼は言つ。

「何を？」

「彼女の運命の一つが、この世界と交錯するのを…そして…」

目の前の青年にしては珍しく真剣な表情を見せる。

「この世界でしか、彼女は生きられない」

この言葉の意味を分からぬほど、アルフォードは無知ではなかつた。

「どの『未来』でもか？」

「それを『天寿』とよぶなら、ね。彼女は25まで生きることはできぬ…そして」

もう一つ写した映像は、最近知った青年の姿。

「彼女がいなければ、彼は『血』を残すことはできない…あいつの子孫が途絶えるなんて、ボク的には許されないことなんだよ？」

わかるだろ？と言つ相手にアルフォードは大きく息を吐いた。

「25、までなんだろう？ならば、せめて彼女に時間をやれ。向こうには何も言わず別れてきた家族も友人もいるんだ」

「…うん、そうだね」

そう言つて、青年は笑う。

「でも、変わつたね。以前の君はそんな風に他人のために動くなんて事なかつたのに」

緩やかに目の前の妖魔の気配が変わる。静かに燃える青銀の炎に青年は笑みを深くした。

「いや～アルフォードつてば惚れてるねえ」

彼の妖魔としての名前を呼ばず、この名を呼ぶ辺りが青年の性格を現していた。

「了解。でも、もう少し時間が欲しいな。あ、時間軸なら大丈夫、ちゃんと調節するから」

「…じゃあな」

え～アルってばもつこいつかいつの～といひ叫びを無視して、男は姿を消す。

「全く、ほんとトライアブなんだからね。お姫様もあんな台詞言つちゃうし。あれって、アルのことだよね」

その一人の間に恋愛感情など彼らも無い」とを承知の上で青年は笑つて言葉を紡ぐ。

「でも、まず危機を一つ乗り越えてもらわなきやね」

そつこいつど、静かに姿を消した。

四海波静か

暗闇の中足元に広がる血だまり。

恐怖の余り声を上げることも動くことも出来ない。

助けを呼ぼうと手を差し伸べるが、その先に誰も居ない。

絶望に押しつぶされる瞬間、誰かが自分の手を取る。そして、静かに囁くような声が聞こえた。

大丈夫、ここにいる

安心したように息を吐いて再び静かな…さつきまでの荒い息遣いではない、穏やかな寝息に青年は静かに息を吐いた。
しっかりと握られた彼女の手は、小さく柔らかい。

女性の手など初めて握ったわけでもない…いや、今まで彼が取ってきた手は、彼女の手よりも細く柔らかかった。働くことを知らぬ手。

あちこちに小さな傷や、荒れた後のある。

そんな手がとても愛しいと思つた。

このままずっと離したくは無い、と。

目を開けるとそこは最近漸く「見慣れた」といつてもいい風景。天蓋つきのベッドに、柔らかなハーブの香りのする部屋。亜衣がこの世界に着てからずっと『えられた場所だつた。

気配を感じると、自分が目覚めたことに気が付いて、白い獣が尾を振っている。その柔らかな感触を確かめながらあれが夢でなかつたと思い知る。

と、耳を立て扉のほうに顔を向けたほむらにその視線を追うと、軽いノックのあとに、ここの中の主人の妹が入ってきた。

「気が付いた？」

手にはティーカップとポットを載せたトレイ。ほむらが静かに尾を振つて彼女に近づく。珍しいこともあるものだと漠然と考えていると、柔らかな香りが鼻をくすぐつた。

はい、と渡されたカップに口をつけると穏やかな温かさが体の隅々まで行き渡るようだつた。ふいに、ほろり、と瞳から零れるものに、ミリアは亜衣のカップを手に取り傍らに置くとベッドの横へと腰を下ろす。

「吐き出してしまいなさい。ずっと楽になるから」

関を切つたように泣き出した彼女の頭を肩に乗せ、ゆづくつとその背中をなでる。

(この役目は自分がやりかたつかでしょうね)

別の部屋で事情徴収を受けている青年を思い出して、ミリアは小さな笑いを口に乗せた。

「落ち着いた?」

自分の守護者にお茶の代わりを持つてこられたると、ニアは亞衣に問いかける。

柔らかな布に顔をうずめ、頷く相手に微笑みかけると優しく立つアルフォードを見上げた。

「… アイ。俺の話を聞けるか？」

いつになく真面目な男の聲音に、そういえば彼が「ほむり」を連れてきたのだと思い出し首を縦に振る。

「まだこれは姫さんにしか話していないが…『扉』があいた」一瞬意味を理解できなくて首をかしげた亞衣だが、すぐに何のことかを悟って驚きに目を見開いた。

「時間軸はほぼ向こうとこちらは一緒。つまり向こうで過ごした時間と同じ時が向こうで流れているって事だ」

分かるか？と、問う男に亞衣が頷くと頭に手が乗せられる。

「お前さんの友達、ってのは話の通りの早い連中で助かつたよ。…ワタナベという男がこいつを貸してくれた。アンタに一番懷いているからってな」

彼女の傍で座っている白い獣を見て、男は苦笑する。

「こいちはとりあえずの田印だ。お前さんが無事に向こうに帰りつくためのな」

一瞬言葉を切って、自分の主に視線を移すとニアは寂しそうに笑い亞衣へと視線を向けた。

「結論から言う。帰る事はできる。…でも行き来はできない」

息を呑む音が聞こえ、亞衣は俯いた。

そんな都合のいい話は、無いと思いながら心の中の片隅にあった希望。

「できて一往復」

ふう、とアルフォードが続けた。

「片道お前さんが居た世界。そして、もう片道

つまりどちらかを選ばなくてはいけない、といつことじだ。

「一向向こうに帰つて考えればいい。いつでも迎えに行くし、向こ

うで一生を終わつても、それはお前さんの人生だ」

あいつは怒るだらうな、と心の隅で考えながらアルフォードは言つ。

「今すぐに結論をだせという訳でもない。このままこつちで過ぐすのもお前さんの自由だ」

一応『あちら』では留学扱いになつてゐると男は教えてくれた。

「お前さんの友人たちの尽力だ。…ああ、あと噂の『りつちゃん』からの伝言だ」

はつとしたように顔を上げた亜衣にアルフォードは笑いかけた。

「『』一年分学費もつたいなくない?』だ、そうだ。どんな意味かは知らないが

思わず噴出してしまう。本来大学の学費とつのは、年に二回支払うものだが、亜衣の場合特殊な事情で全年度支払済みだつたのだ。

「やうですね……」

そうだ、と亜衣は思う。

自分はあの友人たちに説明しなくてはいけない。

「選べられるのであれば、チャンスがあるのなら、それを生かさなきやいけませんね」

2年という月日は長いのか、短いのか。その間、向こうにむかひちらも同じように時間は流れる、自分だってどう動くか分からぬのに、他人でさえあれば尚のこと。

でも、それでも。

「帰ります」

一人の顔を見て、亜衣ははつきりといった。

「2年…自分で決めた年月の間に決めます」

こちらに来たかつたら迎えに来てくれますか?との問いにアルフォードは微笑んで頷いた。

「心配するな、ちゃんと『印』はおいてきた」

『印』とはなにか、あえて亜衣は尋ねなかつた。近い将来知ることができるものだ。

「でも、ま、もう少し休んでからだな」

はい、と頷くと軽いノックの音が聞こえた。ミリアがドアを開けると思わず亜衣は目を見張る。

少し困った顔でミリアは礼をとる。その動作で相応の身分の人だと気づき、亜衣はベットを降りよつとした。

「構いませんよ、どうぞ、そのまままで」

その外見にふさわしい涼やかな聲音で青年は亜衣を制する。言い方は穏やかなのに有無を言わせぬ響きがあつた。

「災難でしたね。体の調子はいかがですか?」

「あ…は、はい。もう大丈夫です」

声が上擦るのが自分でも判る。青年は亜衣のベットの傍まで来ると、柔らかな微笑をその口に乗せた。

その瞬間、違和感が彼女を襲う。

軽く首を傾げる亜衣の姿に、ミリアが苦笑を向けた。

「閣下。この子に偽りは効きませんよ。お止めになつてはいかがですか?」

青年はミリアを見、亜衣に視線を移すとその表情を消した。ようやく、違和感が消えて彼女はほっとした表情をみせる。

「なるほど、ガイゼルさまがお気に召すはずだ」

先ほどとは打って変わった冷たい調子の声だが、この方が彼にふさわしいと亜衣は密かに思つ。

「亜衣、リュクレオン・フェルナンデス・グランディア公爵様よ…この国の宰相閣下でもあられる方だわ」

流石に驚いて再びベットを降りようとすると、リュクレオンは亜衣の肩に手を置いて押しとじめた。

「そのままと言つたのは私だ。休んでいなさい」

思わず頷くと青年はミリアの方へ瞳を向ける。今までの表情はどこへやらの穏やかな顔となる。

「彼女の身分は保証しましよう。私が用意しなくてもガイゼルさまが嬉々として」用意されそうですが、それでは正直面白くないですから」

この場合面白くないの話では無い気がするが、あえてそのまま放置をして、ミリアは深々と青年に礼をとつた。

「それでは私はこれで。ガイゼルさまとカークには一刻も早く帰国するようお伝えしておきましたが、できれば貴女からもお口添えくださいますよ」

では、と青年は扉の外へと消えた。リュクレオンがこの部屋に居た間、アルフォードを一度も見よつとはしなかった。

「やれやれ」

大きく息を吐くアルフォード。ミリアは「お疲れ様」と声を掛けて、宰相を送り出すべく、外へと出て行つた。

「あ…」
「ん？」

思わず声を出してしまったが、軽く首を振ると亜衣はアルフォードに笑顔を向ける。

「でも、宰相さまが『さま』をつけるガイゼルさまって何ものなんでしょう？」「本人はカーカさんの上司だつておっしゃつていましたけど」

彼女の気遣いに笑顔を見せると、アルフォードは少し考えるそぶりをして、唇に人差し指をあてて「内緒だぜ」と亜衣の耳元に囁いた。

「…国…つて」

慌てて自分の手で自分の口を塞ぎ、彼女は肩を落す。

暫く呆然としていた亜衣だが、ふと思いついたように息を吐いた。
「でも、凄い方ですね、ガイゼルさまもカーカさんもアルフォードさんも趣はそれ違うけど、皆さんとも素敵なお方々ばかりなのに、なんというか、言葉にならないですね」

誰のことを指して言つたのか気づいて、男は苦笑を浮かべた。

「少なくとも俺の知る限りで、あの宰相さんの上を行く外見の持ち主は居ないな。頭脳も手腕も何もかも、な」

自嘲めいた笑いを浮かべるアルフォードに軽く眉を寄せるが、ふ、と同じ様な笑顔を浮かべる。

「できれば、このままこの国に居たい、つて気持ちのほうが大きいんです」

視線を移すと、亜衣は掛け布をぎゅっと握り締め遠くを見つめる眼差しをする。

「今でさえ、身分も、何もかもつりあつ人じやないつてことも、最初に出了つた責任感だけで傍に居てくれるつて事も分かっているのに、この上一年も離れたらどうするんだらつ、つて」

ソレは違う。そう言おうとしてアルフォードは口を開かず。それを告げるべきは自分ではない。

「つっちゃんが言いたかったのは学費…学び舎でかかるお金のことじゃなくて、後悔しないかつて事なんです。何もかも中途半端に投げ出して、こちらの世界に落ち着いて、それでいいのか、って」だから帰つて来い、そう彼女の友人は言うのだ。たとえ残された日が少くともやれる限りのことをやつてからどうしたいのか考えればいい、と。

「一年の間に、素敵な人が現れて結婚してらっしゃる可能性だってありますし」

それはどうだろ、と男は思う。あの青年が自分の主より先に身を固めるとは到底思えない。そして、その主の想われ人は、まだ自分に枷をつける気などないだろ。

「ひょっとしたら、私にももっと好きな人が見つかるかもしれませんしね」

どこから慌てた気配がしたが、気が付いたのはアルフォードだけであつた。それに、小さく笑うと男は亜衣の頭に手をやる。

「必ず見つけてやる。何処に居ても、何があつても。呼べば応える」男の言葉に亜衣は笑つて頷いた。

「もう少し寝るがいい。どちらにしても体を休ませなくては話にならないからな」

頷いて横になつた亜衣の掛け布を直してやると、窓際のカーテンを引いた。

「お休み
「おやすみなさい」

部屋を出ると、少し離れた場所で立ちすくむカーケの姿があつた。視線で彼を誘つとミリアやガイゼルの居る居間へと場所を移する。

「亜衣の様子は？」

「もう少し眠るようになってしまった。今ままじゃ、移動した途端倒れちまう」

「では、やはり帰ると？」

「どういづ道を選ぶにしろ、一度は戻るべきだと決めたそうだ」

ソファに座り俯く青年に、彼の主は穏やかな表情を向けた。

「お前はどうする？」

うつろな顔を上げた部下に呆れたような顔をしてから、ガイゼルは言葉を続ける。

「彼女は後悔しないために一度戻るという。その結果辛い思いをしても、それを全て飲み込み覚悟で行くのだろう。お前はどうする？」

目を閉じて俯いた青年は長い間、じっとその姿勢のままで居た。残された3人は静かにその様子を見守りながらお茶を飲む。

カークの前に出されたお茶が冷め切ってしまった頃、顔を上げた部下にガイゼルは笑顔を深くする。

「仕方が無いね。セリアルに会えなかつたのは残念だが、國に帰る」としよう

ソファから立ち上ると、カークはガイゼルの前へと跪いた。

来た時と同じ洞窟の中で、亜衣はカークと向き合っていた。洞窟の入り口にはガイゼルとミコア。亜衣の後ろには少し離れてアルフォードが立っていた。

結局最後までミリアの兄であるサイラスには会つことができなかつたが、それは次回のお楽しみ、と彼女は笑う。

「つていうか、会つても面白くもなんともないわよ、目の保養にもならないし」

ミリアの言葉に苦笑しながらガイゼルは「確かに熊だね」という。この青年の正体を知つてしまつたが、アルフォードとの約束があるので、知らない振りを通した。とはいっても、どこかざくしゃくしてしまうので、なんとなくばれている様な気もしている。

「色々ありがとうございました」

であつたときと同じ異国の姿に、カーキは目を細める。

「元氣で」

色々考えたものの、結局言えたのはこの一言だった。向こうでガイゼルが「ふがいない奴」と呟くのが聞こえる。

「じゃ、行くか」

アルフォードの言葉に、顔がゆがむが、最後まで笑顔で居よつと手を握り締め入り口に居る一人にも頭を下げる。

そうしてアルフォードの近くへと一步踏み出した時。

「亜衣」

ガイゼルたちと賊に襲われたときにも感じた彼が自分を呼ぶときの

響きの違和感によつやく思にわたる。

彼は正確に「亞衣」と発音しているのだ。

青年は彼女の手を取り、小ちく何か咳くとその掌に唇を寄せた。

「また… 会える日を楽しみにしてこね」

一瞬抱きしめられた後、軽くアルフォードへと押しやられた。呆気に取られたあと、亜衣が見せた笑顔に、この先何があつてもその顔を忘れない限り耐えていける、と思う。

光の粒子に囲まれながら、彼女は静かに姿を消した。

傍に居るガイゼルにだけ聞こえる声でミリアは笑う。

従妹の言葉に頷くと青年は部下のほうへと進んでいった。

58

「いいのかな？」

「いいんじゃね？なんだかんだであいつの家金持ちだし」

「お前、それ本人の前で言うなよ」

「そこまで命知らずじやない」

戻ってきた世界。帰ってきた日常。

でも、それだけじやない。

窓の外の空を見上げて、亜衣は微笑む。

…また、いつか。

楽しみにしているといつてくれた彼ががっかりすることの無いよう
に。

少なくとも、自分に恥じることの無いよう生きていこうと思つた。

春宵一刻値千金

「ほつ」

アルフォードは目の前の相手を見て目を細めた。

「気配をたどって来てみたが…これは、これは」

突然現れた男に驚いた彼らだが、すぐに身構える。ソレを見てこういつた状況に慣れていることが伺え、男は笑みを深くする。

「結界があつたはずだが」

「ああ、何かあつたな」

それがどうしたと嘯く相手に渡辺は眉を寄せた。

「…目、と力か。この世界では難儀な代物だな」

「放つておいてくれないかな？少なくとも君たちのような『モノ』の相手をするには困る力ではないけどね」

くすくすと笑いながら井上は言つ。しかし、その瞳は笑つていなかつた。

「彼は敵ではないわ」

突然聞こえた声に、その視線が集まる。

「久遠！」

「どうしてっ！」

慌てて彼女を庇うように渡辺がその傍へと行くが大丈夫、と美冴は笑う。

ふと男に視線を移して彼らは驚いた。

驚愕に見開かれた瞳、微かに震える体。

「随分と人間くさくなつたこと」

臆することなく男の傍へと彼女は向づ。

「…リア？」

「美汎よ。久遠 美汎…ミリアムという名もあるけどね…同じまでもいつも、その愛称がつきまとうもたいだわ」
暫く息を止め、美汎を凝視していたアルフォードだったが、やがてそつと彼女の体に腕を伸ばし包み込んだ。

「亜衣は『トワ』に跳ばされたの？」

「ああ…」

ふう、と大きく息を吐くと後ろの青年たちに向けて苦笑する。同じように彼らに視線を向けると美汎は「ごめんね」と言しながら傍らの青年を見上げ微笑んだ。

「友人よ。…前世にいた世界での」

「今だつてオトモダチだろう？」

ゆっくりと彼らを見渡し、男は優雅に腰を折る。

「俺の周囲は『アルフォード』と呼ぶ。これでも妖魔のはしぐれだ。リアの…美汎の友人でもあり、お前さんたちが探しているアイが居る次元からやつてきた」

「その名を使つてくれているのね」

「人の世で名乗るのはこの名前しかない」

「…久遠」

こほん、と咳払いをして井上が声を掛ける。

「気持ちは判らないわけではないが、もう少し僕たちにも分かるよう説明してくれないかな」

「悪いわね。転移をさせて疲れてるところなのに」

亜依の事で井上に無理を言つてテレポートしてもらつたのだ。流石に距離が距離だけに相当な疲労が伴つたはずだ。大きく息をついてソファに座ると、渡辺もその隣に腰を降ろす。

向かい側に座つた美冴の背後にアルフォードは立つた。

「悪いな、彼女に関してはここが俺の場所になる」

美冴は静かに微笑むと、友人たちへと向き直つた。

「こことは違う次元に…パラレルワールドとも言つていい世界に

『トワ』という国があるの」

どこか懐かしむ表情で彼女は語る。

「そんな説明でいいのか？」

「大丈夫。このテの話には慣れている人達だから」

青年たちを見ると、それぞれ複雑な表情を返してきた。

「アルフォードという名は、その頃の私の3人居た兄のうちの一人がつけた名前なの」

「俺が人の世界で初めて出会つた『人間』だ」

「そして、日向は今そこに居る、ということか？」

渡辺の言葉にアルフォードは是、と答える。

「彼女は偶然『巻き込まれた』だけだ。巻き込んだ相手を探し出して、この次元を教えてもらつた。俺がここに来たのは、今の俺の主が向こうの世界でアイの後見的立場にいるからだ。だから、本人を連れてくる前に場所の下見を兼ねてやってきた」
まさか、会えるとは思わなかつたが。そう美冴に囁きかけると、男は青年たちへと向き直る。

「この世界と『トワ』が位置する次元は、殆ど対極にあるようなものだが、時間率はほぼ同じだ。と、いうことはこちらで流れた時間の分、向こうでも過ぎていふと考えてもらつていい」

「おばあさんになつた日向さんに会わずに済んだ、といつことだね」「歳をとつた自分を見られずに済んだ、とも言つ」

どんな形にしろ探していた人物の消息がわかつたことで部屋の中の

雰囲気が明るいものになった。

「それで、彼女と一緒に連れてこなかつた訳は？他にあるんじゃない？」

「相変わらず聰いな」

口調はふざけていても、アルフォードの眼差しは真剣だった。小さく息を吐くと、少し困った口調になる。

「彼女があちらに来て一ヶ月…最初に出会った相手がよかつたのか、悪かったのか」

「ああ、彼女は恋をしたんだね」

にっこりと笑つて言う井上に、アルフォードは肩を竦める動作をすることがで應える。

「たかが一ヶ月…それど一ヶ月」

やれやれと息を吐きながら渡辺は苦笑する。自分たちが右往左往している間、当の本人は日常を過ごしていた、というわけだ。

「ちなみに相手は…といつても俺たちの知らない男だよな」

「グレイифォードの血筋だ」

あら、と美冴が零した言葉に友人たちが顔を向ける。可笑しそうにひとしきり笑つて、彼女は口を開いた。

「さつき言つていた兄たちの一人が起こした家系なのよね」

「そう、アルバートの子孫だ。外見はよく似ているぞ。だが、百倍は眞面目な奴だな」

「眞面目なイケメン…確かに好意を持つには相応しい相手だね」

「でも、亜衣はメンクイでは無かつたと思うけど？」

井上と美冴の会話に渡辺が呆れたような顔をする。

「好きな人が居るから、こちらに戻つてくる」と渋つてゐる、というわけでもないわよね？」

「… 言つただろ？俺は下見に来ただけだ。まだアイはこの事を知らない」

微かに彼らは眉を顰める。やがて、三人を代表するかのように井上が口を開いた。

「理由を聞かせてもらえるかな？」

「ひとつは、場所を確認するため。道案内する者が、行き先が分からりません、じゃ話にならないだろ？… そしてもう一つは…」

「周囲の確認？」

くすり、と笑つて美冴は立ち上ると台所に消えた。すぐに戻つてくると、その後ろには一人の後輩がトレイを持って付いてきた。

「気配は感じていたが… また稀有な存在をつれてきたな」

頬を緩めると男は先ほどまで美冴が座っていたソファに身を沈めた。

「そう、アイの身辺がどうなっているか。時間軸が同じといつ」とは、向こうに居る間こちらでは居なくなつている、という事になる。行方不明になつている人物が突然現れたら普通騒ぐだろ？だから、こちらの空間の状況を確かめたかったから、というのが大部分の理由だな」

今までの話を聞いていたのだろう、新たに加わった二人は口を挟むような事はしなかつた。

「ああ、それなら心配ない。田向は留学…他の国に勉強に行つてている、という事になつている」

紅茶に口をつけると渡辺が静かに笑つた。

「時間稼ぎなら、心配には及びません。ひとつお聞きしてもいいですか？」

床にじかに座つた葎の隣に同じように腰を下ろした佐藤は、アルフ

オードにしつかりと視線を合わせた。

「その『トワ』という場所の治安はどうなっていますか？日向に危険はありませんか？」

軽く目を見開いてから、男は隣に腰を降ろした美冴へと視線を移す。「トワはある意味発展の無い・・・というか、こちらの世界に比べると発達なんかの意味じゃ、とても緩やかな、停滞しているといつても過言じやない世界だ。だから、エドワードの頃とかわらねえよ」あらあらと美冴は笑い、怪訝そうな友人達に説明する。

「治安は悪くないと思う。けどね、文明的背景はヨーロッパの中世に近いわね。近代社会においての治安とは比較できないんじゃないかな？色々な意味で違うすぎるから」

「良好とはいえないわけだね」

「俺は主もちだからな。自分の主人とアイが同時に危機に陥つたら、当然主人を優先する。例えそれが主人の意にそぐわないことだと分かつていても、だ。それはカークにも言える事だけだな」

「カーク、という名前なのか、日向の想い人」

渡辺の咳きにやれやれとやつっていた井上だつたが、なにかに気づいたように顔を上げると意地の悪い笑みを浮かべた。

「その意味あいだと、向こうもまた日向さんを憎からず想つている、ということかな？」

「傍で見ていると面白いぜ？どっちも自分なりの理由、とか言い訳があるから踏み出そうとしない。本人達はお互い片思いと思っている両想いつてやつだな」

「フォウつてば悪趣味」

「懐かしい呼び方だな」

ぼそり、と咳いた美冴に向つてアルフォードが笑う。同じ『アル』がつく兄を持っていた幼い少女が男を呼ぶときに使う呼び名。

「・・・こいつを貸そつ」

暫く考え込んでいた渡辺が、懐から出した一枚の紙に呪を唱えると現れたのは一匹の白い獣。

「面白いモノを飼っているな。我らの存在に近くて遠い。生きているが生きていない」

「これなら、同じように次元を行き来できるだりつ。だが、日向では無理だ」

「ああ、俺がフォローしても一往復がせいぜいだ」

彼らはどうぞの『モノ』を見てきたのだろう、とアルフォードは思つ。この世界において違和感無く話が通じるということは返せば、この世界で通常では考えられない場面に遭遇してきた、という事だ。それも一回や二回ではないだろつ。

また、こんな世界にお前は関わっているのか。

傍らに座る美沢を見てアルフォードが微かに眉を顰めた。あの男と和解が進めば自分の存在は必要なくなるだろう。亞依と違い行き来が自由な自分ならば、彼女の傍にいるのも良いかもしない。

心優しいあの姫君なら、理由を話せば「契約」を解除してくれるだろつ。

「決めるのは日向さんだしね」

井上の声に男ははつと我に返る。そして自分が一瞬でも陥った考え

を心の中で嘲笑う。

例え何があつても守り抜く。幼い少女に誓つたのは他ならぬ自分自身だ。

「ボクたちが、ここで何を言つても始まらない。戻るも残るも本人が決めるしかない。とりあえず、居場所と無事が分かつて良かつたよ」

「『ほむら』は田向に一番懐いている。次に葎。本来の主である俺は3番手、という式神にしては頭の痛いヤツだがそれなりに力も持っている。それに、コレがいれば俺が田向の居場所が分かるから、何かあつた時に『式』を跳ばせる

葎、という名に男は反応し彼女へと視線を移した。

「あんたが噂の『りつちゃん』か」

不思議そうに顔を傾げる彼女に男は穏やかな視線を向ける。

「よくアイから名前が出ていた。…彼女の言つ通り、確かに我が主に良く似た資質を持つている」

光栄です、と葎が笑うと男も笑みを深くする。

「ほむら」

葎が呼びかけると、獣は嬉しそうに尾を振り彼女の近くにやつてきた。

「亜衣を頼むね。守つてやつて」

尾を振り、擦り寄る事で獣は葎に応える。

「さて、と

立ち上がったアルフォードは同じよう立つた葎の近くにやつてきて深い笑いを見せた。

「会えて嬉しかつたぜ」

同じように笑顔を見せた葎は、ふと思いついた様に男に告げる。

「亞衣に伝言を頼めますか？『授業料もつたいなくない？』って」不思議そうな表情を見せた男は、首を縦に振ると、美冴の額に唇を落した。

「じゃあな

来た時と同じように突然その姿は消えた。気が付くとほむらの姿もない。

「…唐突なヤツ」

疲れたように座り込んだ渡辺の前に律が入れなおした紅茶を持ってやってきた。

「しかし、お前が別世界の住人の生まれ変わりだなんて知らなかつたぞ」

「言つ必要なかつたし」

あっさりと答える美冴に、その場の全員が脱力する。そうだ、こういう奴だった、と同級生の二人は溜息を吐く。

「前世が別の次元のお姫様でした。その頃の記憶があります。だなんて、言う必要ある？」

「……ないな

渡辺の言葉に彼女は満足そうに頷いた。

「ま、ともかく」

場を收めるように井上がカップを手に気障に笑つてみせた。

「日向さんが無事だったことを今は祝おう。あ、御崎さん、お祝いに何か旨い者でも作ってくれないかな？」「

「御崎の作るものにまづいものは無い」

「褒めてるのよね、それ。りつちゃん、お願ひしても良い？」

苦笑をして褲が立ち上がる。その後を佐藤が続くといふ、いつものパターンだ。先程もお茶の用意をすべく台所に居た時にアルフォードが現れて、出るに出れなくなつていたところに美冴がやってきたのだ。

日常が漸く戻つてくる。チャンスがあり、選ぶことができるのなら戻つてくる。彼らの知る日向 亜依とはそういう人物だ。

数日後、光の粒子の中現れた友人を彼らは笑顔で出迎えた。

蛇足（前書き）

文字通り「蛇足」です。若干説明不足を補つたつもりですが、妙ですね。

「知っていたな」

来るなり、そう言った相手に『彼』は綺麗な とても胡散臭い笑い顔をしてみせる。

「当たり前じゃないか。ボクが何の為に『あの世界』に行つたと思つていたんだい？」

ふ、と相手は、その笑顔を消すと剣呑な光をその瞳に宿した。

「あの魂をあそこにまで戻すのに、一体何回生まれ変わらせたと？ カークの事がなかつたらキミに出でえ会わせるつもりはなかつたんだ」

相手のその言葉に、アルフォードは重い溜息を吐いた。

「姫さんとの契約がなければ…俺すらそう思つた。『あいつら』に固執するなど言つほうが無理だな」

「そういうことさ。あの一人の魂は稀有なものだった。だからリアは…サリアードは殺されたんだ」

遠い昔、この二人の寵愛を受けた一人の人物。あまりに強大な力を有する彼らの固執は、その眷属ともいえる部下達の妬みを買い、命をも狙われた。…いや、命ばかりではない、魂の存在すらも抹消しかねない勢いだつたのだ。

「命を助けることが出来たのは、ホークだけだつた。リアは存在そのものを消されたと思っていた」

「確かにね。ボクが駆けつけたとき全ては終わっていた…だが、彼女の魂は思った以上に強かつたんだよ」

自嘲気味に「彼」は笑い、言葉を続ける。

「あの強い魂ゆえに、ボクらは彼女に惹かれた。そして、その強さはある意味諸刃の剣だつたんだ」

何度も生まれ変わらせて、前世の魂の記憶が強すぎて、その精神を蝕んでいく。

もつやめようと…このまま、彼女の魂を永遠の常闇で眠らせてしまおうと、何度も思つたか知れない。

「でも言つんだよ、彼女は…『大丈夫だよ、ラル』って」

自らその名を唱えたことで、彼の存在が形作られていく。彼の少女が与えた名前とその姿に。

「キミが、王家の血筋に彼女の魂と似た『もの』を見つけ契約を結んだ時、正直僕は羨ましかつたよ。執着を持ちながらも、新しい魂とやり直そうとしているキミを、ね」

囚われたまま、身動きできないボクとは違う。

「俺にはお前のほうが羨ましいが、な」

いずれ、ミリアは自分の下を離れて、かの青年の手を取ることだろう。その時自分はどうするのか。

確かに彼女に対し恋愛感情は無い。しかし、一度契約を結んだ相手は魂との繋がりを持つ。

心優しい彼女は、自ら手を離すことはないだらう。しかし、それがあの男が黙つてみているとは思えない。

血筋だけであの男がミリアを妻に選ぶなどとありえない。お互に気付いては居ないようだが、いや、男のほうは、少しづつではあるが、その感情に気付き始めているようだ。

「運命なんて、未来なんて、数多の選択肢から成り立っているんだ。見える力を持つていいのなら、多少自分の都合のいい方向を選んだつて罰は当たらないと思うよ」

「…お前なあ」

「解らないものに手は出せないしね…といひドキミ、彼らに恩を売りたくない?」

「彼ら?」

「そう、サリアの…美冴の友人達に」

不思議そうな眼差しを向ける古い友人に、ラルは爆弾を一つ投げかける。

「つて…お前つ」

にこり、と男に笑いかけると、彼は瞬く間に姿を消した。

「一体、俺にどうしろというんだ…いや、それよりも」

どれだけの世界を知っているんだ。

咳きは音にはならず、大きな溜息と共にアルフォードもまた、その空間から姿を消した。

彼が、渡辺の血筋の消息を伝えたのは、これより一年後の事であつた。

蛇足（後書き）

これで、この話は一旦終了です。お気に入り登録をしてくださった皆様、ここまでお付き合いくださった方々に深く感謝を捧げます。ありがとうございました。良いお年をお迎えください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6736p/>

守り人

2011年1月5日00時48分発行